

# 石川県立美術館だより

平成15年12月1日発行 第242号

## 特集 彫刻 木のかたち・石のかたち

12月3日(水)~24日(水) 会期中無休 午前9時30分~午後5時(入館は午後4時30分まで)



SLIDE No.5 山下晴子  
(3ページ 常設展示室(第4展示室)参照)

### 目次

天神画像と文房具、大乘寺の文化財 .....	2	展覧会回顧(日本画家 中町進の世界) .....	5
彫刻 木のかたち・石のかたち .....	3	現地見学報告、ミュージアムコンサート ...	6
常設展示室 主な展示作品 .....	3	企画展示室、各地の展覧会 .....	7
連続講座報告・第2回(美術館よもやま話 ・ ) ...	4	12月の行事案内.....	7
美術館小史・余話(39) 企画展TOPIC .....	5	所蔵品紹介、ミュージアムショップ通信他 ...	8

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

常設展示室 前田育徳会展示室)

特集

# 天神画像と文房具

12月3日(水)~24日(水)

「天神さま」と呼ばれ、親しまれる天満宮(天神社)の祭神菅原道真(八四五~九〇三)は、平安時代を代表する学者・政治家で、政治家としては右大臣にまで上りつめましたが、異例の出世に対するねたみから、無実の罪により左遷され、失意のうちに配所の九州太宰府で生涯を閉じました。その後起こった災害や、関係者の不幸は、道真の怨霊によるものと恐れられ、道真は天神として京都・北野に祀られました。最初怨霊として恐れられた天神は、その後、学問・文芸・書道の神として、さらには子供たちの神へと変容・多様化し、「天神さま」として親しまれるようになりました。

前田家では藩祖利家の頃より天神信仰を有していたと思われ、三代藩主利常は、幕府へ提出した「寛永諸家系図伝」には、菅原道真を祖とするものと主張しています。また、京都・北野天満宮を崇敬していた利常は、明暦三年(一六五七)小松に北野天満宮の四分の一の規格の小松天満宮を建立しました。この時、後水尾上皇から宸筆の色紙が認められる天神画像が贈られ、以後前田家の至宝として崇拜されてきました。以後歴代藩主は、積極的に天神関係資料の収集を行うとともに、領内においても天神信仰の振興を図ることになります。今回、天神画像は、胞輪天神画像(束帯天神画像)、渡唐天神画像をはじめ六点展示します。

一方、文房具は、文人のたしなみとして、歴代藩主が主に中国から招来の品々を収集、愛玩したものが残されています。文房四宝(筆・墨・硯・紙)のほか、筆架、文鎮、硯屏、水滴など多種にわたり収集されています。銅器とともに、中国人の好みからきていると考えられますが、玉や象牙といった高価な材料に精緻を尽くした技術がうかがえる作品群です。実用性ととも、書齋の愛玩品として鑑賞に値する見事なものです。銅鍍金翡翠形水滴、瑪瑙梅彫筆架、白玉蓮葉式筆架、象牙車輪文鎮をはじめ三十六点展示します。

金沢市の長坂町に位置する曹洞宗寺院・大乘寺は、当地の守護であった富樫家尚が弘長元年(一一六一)または三年とする説も有り、現在の野々市町に一寺を建立し、真言僧澄海を住持させたことに始まると伝えられています。後に澄海は、正応四年(一二九一)、永平寺より徹通義介を招き禪寺として開山。大乘寺は永平寺以外に建てられた最初の曹洞宗寺院であることから、「曹洞宗第一の本山」とも称されるのです。

続く二世瑩山紹瑾(永光寺・総持寺開山)、三世明峰素哲(永光寺二世)の時期にその基礎は築かれ、室町時代以降も、足利幕府の祈願寺として寺領・屋敷を安堵されてきました。しかし、十五世紀末、一向一揆によりその保護者であった富樫家が滅亡。その平定にあつた柴田勝家の兵火に遭い、大乘寺も焼失するのです。

その後、加賀藩二代藩主・前田利長の臣下にあつた加藤重廉により、現在の金沢市本町に移転・再興。慶長六年(一六〇一)、更に加賀藩八家本多家々租・本多政重により、その屋敷の隣接地であつた現在の金沢市本多町に移ります。

「大乘寺中興の祖」といわれる二十六世月舟宗胡の時代、宗規の回復と移転計画が進められ、二十八世明珠心の時代にあたる元禄十年(一六九七)、現在の地へ移転しました。

現在本館に一括寄託される大乘寺の文化財の中でも、曹洞宗高祖・希玄道元が記した重要文化財『佛果碧巖破悶擊節』は、中国へ渡つた道元が一夜にして書写したと伝えられることから、「一夜碧巖集」とも称され、曹洞宗において、最も貴重な法典とされています。本特集ではその他、『羅漢供養講式稿本断簡』『韻州曹溪山六祖師壇経』『三代嗣法書』『支那禅刹图式』(いずれも重要文化財)などの曹洞宗関連文書や歴世の頂相、長谷川左近筆『十六羅漢図』を紹介いたします。

常設展示室 第2展示室)

特集

# 大乘寺の文化財

12月3日(水)~24日(水)



開山 徹通義介頂相 大乘寺蔵

常設展示室(第4展示室)

特集

# 彫刻

## 木のかたち・石のかたち

12月3日(水)~24日(水)



朝 書間弘



微風 山本力吉

今回の特集では、「木のかたち・石のかたち」というテーマでそれぞれの素材が、彫刻と造形的な作品においてどう生かされているのかご覧いただきたいとあります。木と石という素材の違いによってカーヴィングの仕方に違いが見られます。また石には大理石とかオニキスのように柔らかく彫刻に適したものがあることから、表現方法も多彩になっています。具象・抽象によつての素材の生かし方の違いを、比較対照しながらご覧いただくのも楽しいことではないでしょうか。

新収蔵品の山本力吉作「微風」は木彫の堅実な作風を感じさせる女性像です。右手に葡萄の房を持ち、左足を少し前方に踏み出し、落ち着いた中に静かな動きを感じさせています。頭髮に微妙なそよぎを表現して、表題にふさわしい微風が感じ取れます。作者の円熟期の、代表作といつて良いでしょう。ちなみに、この作品は、再興第三十六回院展入選作です。

対照的に石の抽象的な造形作品が、山下晴子の「SLIDE No.5」(表紙)です。白大理石の柔らかい素材を使い、リングの部分を輪切りにして、4カ所ずらしています。この作品では、形態の面白さや、白大理石表面の加工の仕方を変えて材質感に変化を持たせています。また台座に御影石を使つており、台座と作品そのものの関係もまた興味深いものがあります。この二点をはじめ、全体で十七点展示します。

主な作品

会話

音色

朝

微風

SLIDE No.5

ワ・タ・シ 今ナニヲ

田中太郎

田中太郎

書間弘

山本力吉

山下晴子

梶本良衛

### 前田育徳会展示室

特集 天神画像と文房具

2ページをご覧ください

### 第1展示室

●色絵雄香炉

色絵雌雄香炉

野々村仁清  
野々村仁清

### 第2展示室

特集 大乘寺の文化財

佛果碧巖破関撃節上・下

羅漢供養講式稿本断簡

三代嗣法書

色絵布袋図平鉢 古九谷

色絵鳳凰図平鉢 古九谷

### 第3展示室(油彩画・版画・水彩)

油彩画

ロココに想つ

高原

黒いタイツ

版画・水彩

Rising Sun

或る風景

### 第4展示室(彫塑)

特集 彫刻 木のかたち・石のかたち

上段をご覧ください

### 第5展示室(工芸)

黒絵鳥紋楯円壺

漆器落葉文庫

友禅訪問着「石橋」

青銅器「瑞鳥」

十代大樋長左衛門

竹園自耕

木村雨山

板坂辰治

### 第6展示室(日本画)

山水図

深秋図

能登海浜加賀山麓図

梶野玄山

木村杏園

山脇晴雲

観覧料

個人

一般 350円

大学生 280円

高校生以下は 無料

団体(20名以上)

一般 280円

大学生 220円

高校生以下は 無料

常設展示室

## 主な展示作品

12月3日(水)~24日(水)

●=国宝 =重要文化財 =重要美術品  
=石川県指定文化財



友禅訪問着「石橋」

木村雨山



高原 伊東哲

● 連続講座報告・第2回 ●  
 開館20周年記念連続講座  
 「美術館よもやま話」  
 講師：嶋崎 丞すずむ (当館館長)

加賀の茶道（7月27日）

加賀の地における茶の湯というものが、どういう経過をたどりながら、今日の世界に確立されたかをたどってみたいと思います。

前田利家が、福井の武生から天正9年に能登の七尾に入る前は、守護職畠山義総よしかみの文化の全盛時代に相当いたします。ちなみに、能登の畠山家は、足利幕府の三管領家の分家です。京都の華やかな東山文化の様相が、七尾の地で育まれていたことが想像されます。残念ながら上杉謙信の能登焼討ちにより、七尾にはなかなかこれらしい資料も残っておりません。ただ、丸山梅雪という有力な茶人がいたことが、いろんな記録に出てきます。京都の公家の三さん西し美み隆りゅうや武野ぶの紹しょう鷗おうと交流のあった人であります。ちなみに越前三人衆のうち、佐々成政は越中に、前田利家は能登に配置されます。利家は、信長について堺の町衆の今井宗久や津田宗及の茶会にもいっております。能登という茶の心得のある地域に行く武将として利家が選ばれたのは、信長のそういう配慮もあったのではないかと思います。

天正13年、秀吉が佐々成政の越中攻めの帰りに、金沢城で利家の茶の湯の接待を受けています。その時の担当が、家柄町人の片岡孫兵衛です。孫兵衛の奥さんは高山右近の姪で、利休の弟子でもあり、なかなかお茶をたしなんだ人でした。短期間で、利家のまわりにお茶人が増えている様相を、垣間見ることができます。そして翌年、秀吉が京都に大仏殿を建てるに際しては、利家と千利休がいろいろと相談している文献が残っていることも見逃せません。

それから天正19年に、利休が秀吉に切腹を命ぜられるまで、利休と利家、利休とその長男の利長が盛んにお茶会をやっています。そして文禄4年の11月、利家利長親子が、いわゆる加賀八家と八家以下の上級家臣を招いて金沢城で大茶会をやっております。文禄も終わりぐらいになりますと、金沢城を中心として前田利家は唐物を中心としながら、家臣もろとも一体となってお茶会をやっています。

そして慶長2年、利家が今日前田育徳会に残っている有名な富士茄子の茶入を秀吉から拝領して、台子の茶の湯が認可されています。「茶の湯、政道が一致である」、すなわち茶の湯を認可される者は政治と同格の位置づけがなされるという信長の考え方があり、茶人として天下の名師匠として位置づけられたということは、政治史的にも重要な意味を持つことであったのですが、残念ながらまもなく秀吉は亡くなります。最後の醍醐の花見の席上に、夫婦ともに呼ばれたのは、利家とまつだけだったのは有名な話です。

加賀藩の美術工芸（9月15日）

加賀の美術工芸品は、茶の湯の美術と非常に深い関係があります。お茶会での美術工芸品の使い方の中に、今日のお茶会でもそうですけれども、古美術品を使うのが一つの方法で、また現代の作家のものを使ってどういうお茶会をやるかという、二つの方法が考えられるわけです。藩主という大名が、大変な名品を集めてお茶会をやるとともに、その当時その地域で活躍している作家たちの手によった道具を使うということです。前者は、お茶会をやることもさることながら、大変な名品を集めて書院のところに作品を並べ、集まった人々にそれを賞翫していただくという割合が強く、そのためには当然名品を集めなければいけないという考え方がでてくるわけです。そのことには、日本ばかりでなく、例えばイタリアのメディチ家も、やっぱりそれと同じ考え方で名品を集めています。それが現在、北イタリアのウフィツィの美術館のコレクションにつながっているわけです。後者は、お茶会では、実際にその美術工芸品を使うわけで、そのことが美術工芸品の育成につながってゆくということでもあります。

そして、お茶会を開くときには、茶室という空間の中で、道具の取合せによって、茶の湯の美術の演出をやるわけですけれども、そうすると当然道具の組合せというものができます。そういう全体として競合する美意識と言うのでしょうか、茶室の中に道具を組み合わせるということは、取合せながらその道具が一点ものすごく突出してもいけない、全体のバランスが取れていなくてはいけない、そのバランスが取れていてその道具一点一点がその場に占める位置、存在感と言うのでしょうか、そういうものを持つ美術品であるというようなことが、お茶会の道具として必要なわけです。加賀藩の美術工芸を見てみた場合、やはりその背景にはそれなりのお茶人の存在というものを、無視するわけにはいかないということです。

そこでやはり、小堀遠州の存在を忘れることはできません。三代藩主利常と遠州との絡みの中で、どういう美意識がそこで取合せながら演出されたのかを見るには、利常が隠居した小松城の葭嶋書院の建築金具を見ることによって、ある程度理解することができるのではないのでしょうか。そして加賀藩で、工芸育成の原点となったのが、御細工所という組織です。大坂夏の陣以後、実質的に戦争がなくなり、武具甲冑、刀剣の手入れを行うことが少なくなるなか、それをものづくりの工房に変えていこうということで始まったのが、御細工所の創設です。藩の御用のお仕事、ものづくりの仕事を一手に引き受けるための御細工所の組織というのは、加賀藩以外にはどこにもなく、やはり全国一の大藩であつたらこそ、一種の工房を丸抱えでもって最後までやっていけたのだと考えられます。

美術館小史・余話 39 嶋崎 丞(当館館長)

まぼろしの分館構想

先号で述べたように、新美術館設立構想段階の昭和55年(1980)の時点では、従来からの石川県美術館は、新設される石川県立美術館の分館にして、石川県の工芸の歴史的な流れを俯瞰することのできる工芸館として位置づけるといふ考え方であった。建物自体も、石川県出身の著名な建築家谷口吉郎氏の代表作でもあり、工芸王国を自負する石川県にとっても、そうした方がよいのではないかと私自身も考えていた。

新しく建設する美術館は、いわゆる公立美術館建設ブームの最後の時期に当たるところから、どうせ建設するならばすでに各地に建設されている美術館の規模をしのぐものを作るべきだとの意見が出され、

結果的に延床面積11,427m<sup>2</sup>という当時としては随分と大型の美術館を建設することになった。しかし問題はそうした大型美術館の展示室を、どのような収蔵品をもって埋めるかということであった。石川県美術館時代の約7倍の規模にふくれあがることであり、それまでに収蔵していなかった近現代の絵画や彫刻作品の準備は多少考えてはいたものの、それまでに収集してきた当館のある意味では個性である工芸分野の全作品を別館で展示することになると、新設される石川県立美術館の個性がぼやけて見えにくくなるのではという意見も出されるようになってきた。

種々議論の末、石川県美術館は組織から切り離すことになり、今日ではご周知の通り、石川県立伝統産業工芸館として再活用することになった。従って新館の美術館に工芸を取り込むことになったが、結果として第2展示室は古九谷の常設展示と古美術の特集展示とが併用する形となり、中途半端な状態が今でも続いている。

企画展TOPIC

「北陸の人間国宝展」後編

前編では字数の関係上、控えざるをえなかった、本展を構成する人間国宝は次の23名の方々です。

石川県生まれ 陶芸 = 三代徳田八十吉・吉田美統、漆芸 = 松田権六・大場松魚・寺井直次・前大峰・前史雄・赤地友哉・塩多慶四郎、染織 = 木村雨山・羽田登喜男、金工 = 初代魚住為楽・三代魚住為楽、刀剣 = 隅谷正峯、木工 = 氷見晃堂・川北良造、截金 = 西出大三

富山県生まれ 陶芸 = 石黒宗麿、金工 = 金森映井智

福井県生まれ 和紙 = 八代岩野市兵衛・九代岩野市兵衛

石川県ゆかり 陶芸 = 富本憲吉、漆芸 = 田口善国

から については、これまでによく紹介された方々ですので、 のお二方について、どういうゆかりがあるのかを紹介いたします。

まず、富本憲吉は昭和11年と16年に、本格的な色絵技法を研究するため、現在の加賀市栄谷町の北出塔次郎窯に長期滞在いたします。その紹介者は松田権六であり、以後独自の色絵世界を築いた富本は、30年に色絵磁器で保持者認定を受けます。また、富本憲吉の創作姿勢が塔次郎をはじめ九谷の作家に大きな影響を与え、近代九谷の改革の端緒となりました。

次に田口善国は、東京で蒔絵の師であった松田権六の勤めで、同じく弟子であった大場松魚の紹介で金沢に昭和20年から5年間滞在しています。この間に、

日展初入選を果たすなど、田口漆芸の原初はまさに金沢時代にあり、本展でも数少ない貴重な金沢時代の作品の展示を予定しております。(寺尾健一 普及課長)

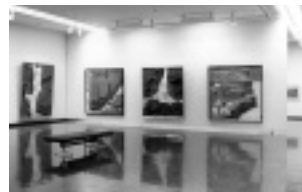


色絵罌粟大飾皿 富本憲吉 昭和16年

「開館20周年記念 北陸の人間国宝展」の会期は平成16年1月4日(日)~2月2日(月)です。

展覧会回顧

「特別陳列 日本画家 中町進の世界」



本展では、中町氏の代表作を、ほぼ年代をおって展示しました。会場で見渡すと、日本的(伝統的)な表現と西洋的(前衛的)な表現が、時代とともに異なったかたちで現れているように感じました。

たとえば、昭和30年代は、海外から紹介された抽象絵画の影響が見られ、身近な街並みや自然が、簡略化された太く黒い線で抽象的にかたちどられ、力強い造形性を発揮した表現となっています。

それも40年代後半になると、前衛的表現の流行が下火となり、高度経済成長における美術ブームも影響して、日本画の表現は大衆に受け入れられやすい穏和な具象表現が、主流を占めていくこととなります。中町氏の作風も40~50年代にかけては、青を基調とした静謐な自然の風景へと移行し、親しみやすい日本的な抒情豊かな世界が展開されました。

その後、国際化、情報化が進み、美術表現も多様化の傾向をみせていくと、中町氏は、日本のみならず、西欧や南米の街並みに目を向け、新たな画風を追究していきます。俯瞰的に街の景観をとらえた表現は、わが国では中世の絵巻物や、近世の洛中洛外図などに先例があり、また、建物のかたちは、視点を移動してとらえる日本的な並列的遠近法を用いる一方、強い明暗法を使って建物の立体感を強調する手法は西洋的といえ、伝統的なものと西洋的なものが融合した表現が見出されるわけです。

このように本展では、時代時代によって変化する中町氏の作風の広がりや豊かな創造力を、堪能していただけたのではないのでしょうか。

(西田孝司 学芸主査)

## ミュージアム・コンサートのお知らせ

～オーケストラ・アンサンブル金沢による室内楽の調べ～

今回のコンサートは、これまでと同様ホールで行います。開館20周年記念行事の最後を飾るにふさわしい、トランペットを主にした室内楽の晴れやかな音色をお楽しみください。

【日時】平成16年1月21日(水)午後1時30分～

【会場】石川県立美術館ホール

【演奏曲目】サン＝サーンス作曲七重奏曲 ほか  
曲目及び演奏者の詳細は次号で紹介します。

【応募方法】

往復ハガキでご応募いただき、入場整理券を発行いたします。応募多数の場合は抽選となります。往信用ハガキの裏面には「コンサート希望」と明記し、住所・氏名・年齢をお書きください。返信用ハガキの表面には、返信先(住所と氏名)をお書きください。返信用ハガキの裏面には、入場整理券として印

刷する部分ですので、何もお書きにならないでください。

次の注意事項をお守りください。

- ・応募資格は中学生以上に限ります。
- ・入場者一名につき、往復ハガキ一通でご応募ください。お一人で何通も出されたものや、連名のもの、記載事項が不備なものなどは無効となりますので、ご注意ください。
- ・当日キャンセルによる空席が生じた場合は、締め切りまでにご応募いただいで抽選もれとなった方の中から、所定の手続きをとられた方に入場していただきます。
- ・当館からの返信は、再発行いたしません。

【応募締切】平成16年1月7日(水)必着分に限ります。

【備考】演奏会だけの入場は無料ですが、展示室への入場は別途料金が必要ですので、ご注意ください。

## 文化財現地見学報告

第33回文化財現地見学は「飛鳥・室生の里を訪ねて」と銘打って、10月18日(土)、19日(日)の二日間にわたって実施されました。参加人数は45名。飛鳥方面は、大型バスで通るのがやっとの狭い道が多かったのですが、運転手の見事なテクニックのおかげで、予定通りに見学地を回ることができました。加えて、天気にも恵まれたことが何よりのことだったと思います。

18日(土)朝7時に美術館を出発。昼食休憩をとった後、最初の訪問先である橘寺(明日香村)へ。本堂前で、聖徳太子以来の寺伝と寺宝についての説明を受けました。翌日の法会の準備ということもあって、大勢の門徒の方が作業中の本堂では、特別に奥まで進んで聖徳太子講讃像を拝観することができました。さらに、宝蔵も特別開扉されており、重文の地蔵菩薩像などを拝観しました。

蘇我馬子の発願により創建された飛鳥寺(明日香村)。蘇我入鹿の首塚の説明をきき、甘樫丘周辺の案内を伺った後、金堂へ。鞍作止利が作った、日本最古の仏像である飛鳥大仏について詳しく説明をいただきました。

古い歴史のある社寺が建ち並ぶ明日香村の中にあつて、最も新しく近代的な建物である奈良県立万葉文化館。「万葉集」にちなんだ展示を見ることができました。館内では2組に分かれて案内を受け、ジオラマやコンピューターを使ったわかりやすく楽しい展示で、万葉の文化について学習することができました。折しも展示会は「飛鳥を彩る歌人たち」を開催中で、歌をテーマに作家達がそれぞれの思いを絵にした日本画展を鑑賞しました。

二日目。早起きして、橿原神宮へ参拝に出かけたという方もいて、元気いっぱいです。ホテルを後にして一路、桜井市方面へ。安倍文殊院(桜井市)ではお菓子

と抹茶をいただき、さわやかな気持ちで本堂へ案内されました。ご住職のわかりやすく、上手なご説明で、仏像のことや文殊院の歴史などお話していただき、楽しく和やかな雰囲気でした。鎌倉時代に、快慶によって作られた文殊師利菩薩像を間近で拝観できました。

次は、聖林寺(桜井市)へ。本尊の子安延命地蔵を前にして、解説をしていただきました。本堂からは、三輪山や大和盆地が見渡せ、心地よい風を感じながら国宝の十一面観音を拝見することができ感動しました。

室生村の途中に大野寺の磨崖仏を見たいということになりました。時間の都合もあり車内から対岸を遠望するだけでしたが、狭い道を華麗なテクニックで通り抜けたバスの運転手に、大きな拍手が湧き上がりました。

空腹を満たした後、室生寺(室生村)へ。境内を自由に回って、国宝・重文のお堂や、仏像を拝見しました。深山に静かにたたずむ五重塔はしっかりと落ち着いた風情が感じられました。その後、慶雲殿に入って、お茶をいただきながら執事の方から、五重塔復元にまつわるお話を伺いました。

朝早く出発し、金沢到着も午後7時を回っていましたが、どなたも疲れた様子はさほど見られずほっとしました。皆様のご協力のおかげで予定通りに旅行を終えることができました。終わりに、ご参加の皆様と、各見学地でお世話下さいました関係各位に深く感謝申し上げます。



安倍文殊院にて

## 企画展示室

### アート・ノウKANAZAWA 第42回北陸中日美術展

12月6日(土)~17日(水)(第7~9展示室)

部門 平面・立体・工芸

現代美術の創造を目指す本展は、新人作家の登龍門として幾多の新進作家を送り出しており、個性豊かな力作が数多く出品されます。

全国から応募のあった作品を、美術評論家・針生一郎氏、多摩美大教授・建畠哲氏の両先生が審査、入賞・入選作品約140点を展示します。

入場料 一般・大高生 700円(500円)  
中学生以下無料

( )内は前売り・団体料金  
当館友の会会員は、会員証提示により  
団体料金になります。

連絡先 金沢市香林坊2-7-15  
北陸中日新聞事業部 ☎ 076-260-2581



### 第27回日創展 & 新院展選抜金沢展

12月20日(土)~22日(月)(第8・9展示室)

日創展は会長丹羽俊夫(新院展副会長)の枕屏風作品、理事長三宅厚史、事務局長今村文男の力作をはじめ、石川、富山、福井、岩手から幅広い年齢層の日本画約60点を、新院展(東京展)から最高顧問棧勝正、会長石井宝山の作品をはじめ約40点を選抜して展示します。

主な出品者  
北出朝之 保科誠 作田保夫 柴田輝枝  
南好乃 中村勝代 松尾功一郎 福井淳一  
村中博文 伊藤夏子

入場無料  
連絡先 金沢市窪1-223 丹羽俊夫  
☎ 076-244-5916

### 第88回公募写真展 研展

12月20日(土)~24日(水)(第7展示室)

東京写真研究会が主催する研展は、研究会(関東、中部、関西、北陸の4支部)の会員と、一般公募の2部門で構成され、約200点が展示されます。北陸から会員の部では、研展賞に吉田淑子、研展奨励賞に越原隆夫、松原宇杏、公募の部では東京都知事賞に水尾伸子、東研賞に鈴木久美子、東研奨励賞に鷹栖悟、杉野時男、福井節子の各氏が受賞しました。

入場無料  
連絡先 金沢市野町4-9-13 内島一郎  
☎ 076-241-2279

## 各地の展覧会 ..... 12月

開催日程、休館日、内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

創立250周年記念 大英博物館の至宝展 12/14まで  
東京都美術館(東京都台東区・03-3823-6921)

国宝 大徳寺聚光院の襖絵 12/14まで  
東京国立博物館 平成館(東京都台東区・03-3822-1111)

「ガウディ かたちの探求」 12/14まで  
東京都現代美術館(東京都江東区・03-5245-4111)

斎藤義重展 12/14まで  
富山県立近代美術館(富山市・076-421-7111)

参加してエンジョイ  
岐阜県美術館所蔵品特別展 12/14まで  
岐阜県美術館(岐阜市・058-271-1313)

フリーダ・カーロとその時代 12/21まで  
名古屋市美術館(名古屋市・052-212-0001)

アレクサンドロス大王と東西文明の交流展 12/21まで  
兵庫県立美術館(神戸市・078-262-0901)

生誕120周年記念  
漂泊する心 竹久夢二追想展 12/27まで  
奈良県立美術館(奈良市・0742-23-3968)

## 12月の行事案内 《入場無料・いずれも午後1時30分から行います》

月日	行事	内容	会場
12/6(土)	土曜講座	アントワヌ・ワトー 人と芸術 (織田春樹 学芸主任)	講義室
12/7(日)	月例映画会	ドラクロワ ロマン主義の逆説 時代に遅れてきた青年(23分) ドラクロワ ロマン主義の逆説 魂の貴族性について(23分)	ホール
12/13(土)	土曜講座	水彩画の美4 (西田孝司 学芸主査)	講義室
12/14(日)	月例映画会	江戸小紋 小宮康孝(25分) 戦火をこえて 紅型 城間栄喜(25分)	ホール
12/20(土)	土曜講座	洋画家列伝17 山口 薫 (二木伸一郎 学芸専門員)	講義室
12/21(日)	CDコンサート	20世紀の名指揮者 レナード・バーンスタイン 2 ブラームス 交響曲第4番ほか(約60分) 演奏 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団	ホール

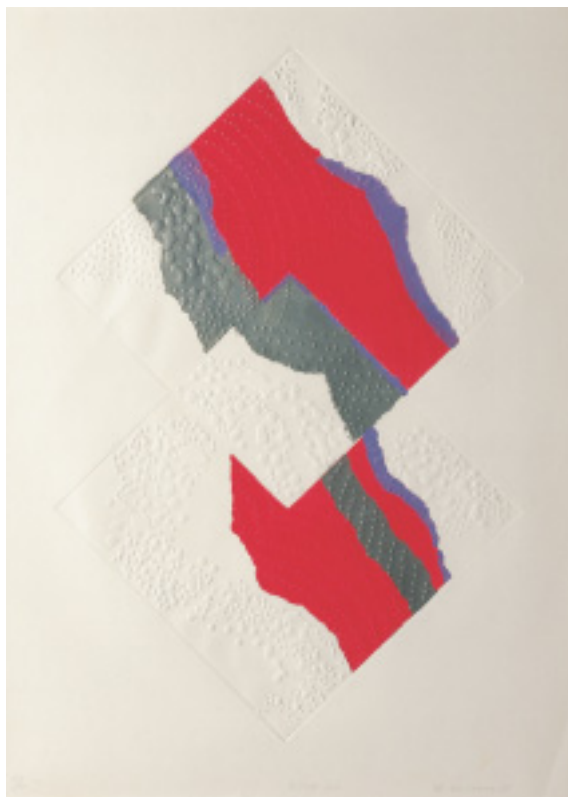
12月の全館休館日は1日(月)、2日(火)、25日(木)~31日(水)です。

勝本富士雄氏は、大正15年1月10日に七尾市に生まれました。京都市立絵画専門学校(現京都市立芸術大学)に学び、須田国太郎に師事しますが、中退しています。戦後、京都自由美術研究会で学び、昭和25年に荒井龍男らのモダンアート協会設立に参加し、翌26年には会員に推挙されます。抽象と幻想展、日米抽象美術展など内外の展覧会に招待され、戦後の画壇において有望な新進作家として活躍しました。また、ガラスモザイクによる壁画でも知られ、県内の公共施設に多くの作品が残っています。

版画の技法は今日様々なものがありますが、この作品は、金属板にドリルや金槌で穴をあけ、それを空刷り(インクを付けずにプレス機で刷ること)するという独自の方法が用いられています。勝本氏は、「板に穴をあけ金槌で強く叩いてなすりつけたものが紙にプレスされると、板の堅く重いイメージだったものが、紙に写しとられることで軽やかになり、光をいっぱい吸っているような感じになる。紙を通して光をまとったような、デリケートな面白さが魅力である。」と語り、楽しみながら意欲的に版画制作をしていたことが伺えます。

紙の表面に凹凸をつくり、作品の表情に微妙な変化を出しながら、シルクスクリーンの技法も併用し、色をうまく使って画面を引き締めています。幾何学的な形を追求しており、菱形を重ねた部分に紙の表面に浮かび上がる陰影を融合させ、鮮やかな色彩が絶妙なバランスで配置されたこの作品からは、清潔感がありクールで洗練された印象を受けます。

第3展示室で12月3日～24日まで展示中



## Rising Sun

紙 空刷り・シルクスクリーン

勝本富士雄 大正15年(1926)～昭和59年(1984)

昭和42年 1967

縦74.5 横54.5(cm)

## ミュージアムショップ通信

今年を振り返ってみれば、開館20周年という記念すべき年で様々な行事や企画展が催され、その準備のため息つく暇がないほど忙しい毎日でした。今は来年1月4日から始まる北陸の人間国宝展開催の準備のため、更に頑張っております!!

さて、今月は「出服紗」と「古服紗」を紹介しましょう。生地の模様は名物裂(主として中国の元・明・清時代に制作され、鎌倉・室町から江戸時代にかけて日本へ輸入された生地のこと)からとっており、6種類あります。とても美しいので、ショップにお寄りの際は手にとってご覧下さい。お茶席では必要になりますので、来年の初釜の時に是非使っていただきたいですね。



出服紗  
(定価6,000円)

古服紗  
(定価2,800円)

## 次回の展覧会

- 特集 橋本雅邦と四季山水図襖  
(前田育徳会展示室)
  - 特集 新春を祝う 源氏絵と古筆  
(第2展示室)
  - 特集 明治の工芸(前期) (第5展示室)
  - 開館20周年記念 北陸の人間国宝展  
(第7～9展示室)
- 平成16年1月4日(日)～2月2日(月)

休館日:12月1日(月)・2日(火)・25日(木)～31日(水)

石川県立美術館だより 第242号

2003年12月1日発行

〒920-0963 金沢市出羽町2番1号

TEL 076(231)7580 FAX 076(224)9550

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>